

第 4 章

実行委員手記

日本側実行委員長
大阪大学3年 安部美里

JKSCの本会議は、両国の実行委員が直接顔を合わせて、気が済むまで話すことができる非常に貴重な時間だ。私がケニアについて興味を持ち、ケニア側実行委員にあれこれと質問したいと思うのと同様に、ケニア側実行委員からも日本について様々なことを訊かれる。

「来年はもっともっとケニア人と話したい。」ケニア側実行委員5名を日本に迎えて開催した昨年の本会議後、これが私の素直な感想だった。充実した時間を過ごし、たくさんの経験ができたと同時に、ケニア側実行委員の質問に答えられないこともあり、言葉の壁や知識の不足を痛感する時間でもあった。

だから、この1年は両国についての知識、情報を深めようとした。分科会も、今までは深く勉強したことがなかった「政治制度」を選択し、まずは日本、そしてケニアの政治に関して学んだ。政治、歴史、文化、言語など様々な分野の文献を探し、それらを読むたびに、新しいことに出会えた。

それでも、今年の本会議、初めて訪れたケニアを「知らない世界」だと感じた。でも、この気持ちは自分の無知を痛感した昨年とは少し違った。ケニアを実際に訪れてみると、感動、驚き、疑問など本当にたくさんの経験があり、実際に訪れないと分か

らないであろう、ケニアの空気感や、人々の温かさ、悪い例を挙げれば、社会の歪んだ部分、自分の目で見て、感じて、新たに知ることが多くあった。だから、そこを「知らない世界」だと感じた。「百聞は一見に如かず」ということわざがあるが、まさにその言葉の通りの経験であった。

このように、実際に見て、聞いて、感じて学ぶことの素晴らしさを感じたが、一方で、日本で勉強していたことが無駄だったとも決して思っていない。それらの知識を前提としてケニア側実行委員と昨年よりも様々な話をすることができたし、それらがあったからこそ、現地での経験がより良いものになったと思う。

私が知らない世界は、世界中に、日本国内でさえも、たくさんあると思う。新たな世界との出会いは、自分の知識を増やし、考えを深めてくれる。だから、これからも、1つでも多くの世界を知り、経験し、それらを自分の糧とできるよう努力し続けていきたいと思う。

財務局
大阪大学3年 奥中郁巳

3週間弱のケニアでの本会議を終え、まず無事に終わったことにホッとしたというのが正直な感想である。

それは昨年の日本開催とは異なり、安全面での配慮・準備に多くのエネルギーを注

いだのが今年であったからだ。テロや強盗などの凶悪犯罪、交通事故に巻き込まれるリスクをできるだけ軽減することが至上命題であった。できる限り多くの有益な情報を集め、また在ケニア日本国大使館や現地に滞在されている方、JKSCのOB・OGの方のアドバイスも大いに活用した。

ここでは非常に多くの学びがあった。特にケニア側実行委員との合意形成の際だ。その学びとは、交渉というものは非常に難しいものであるということである。この安全面でのリスクをどう評価するのか、そのリスクに対し限られた予算の内どれほどのお金を投資するのか、どの場所を訪問するのか、両国実行委員の間で大きく意見が分かれ非常に難しい議論となった。その地に実際に住む側・訪問する側では評価が異なるのは当たり前ではあるが、先入観だけでなく様々な情報・意見を参考にし、議論を重ね最終的に合意形成ができたことは、自らにとって大きな学びとなったと考える。また合意形成は日本ケニア両国委員長の尽力無くしては全く成り立たなかったと感じ、深く感謝している。コミュニケーションの重要さも改めて感じた。

また、実際に訪問すると、これまで少し怖い交渉相手だと思っていたケニア側実行委員が非常に温かく迎えてくれ、実際に対面して交流することとSkypeで画面を通して話すことは大きく異なると感じた。

ケニアにおいても、日本ケニアにおける

文化・経済・社会・宗教など様々な違い、またそれによる価値観の違いを肌で感じることができた。

昨年はケニア側実行委員と話すことでしかケニアを感じられなかったが、今回は五感全てを用いて等身大のケニアを感じることができ、より刺激を感じた。やはり、テレビや雑誌、他人の経験談でなく、実際にその地に行くことでしか得られないモノは確かに存在するのだと思う。

ケニアの土っぽい空気、しかしそこでンドン伸びていくビル、賑やかな車のクラクション、また野生のキリンやカバ、シマウマなどの動物を見たときの感動は一生忘れないであろう。

この3週間だけの経験で終わらせず、これからもケニアと何らかの形で関わりを持ち続けていきたいと感じる。

国際渉外局

関西外国語大学3年 内田あす香

ナイロビへ向かう飛行機の中、あと数分の到着を待ちきれずに窓から景色を覗いてみると、まばらに生えた木々と赤い土に覆われた広々とした大地があった。その時ついにアフリカに来たと実感した。日差しがとても強いが、常に湿度の無い快適な気温と気持ちいい風が吹いていたので過ごしやすく感じた。街を歩けば中国人、你好などと言われ、黄色人種としての自分を意識し

た。

滞在時、ケニアにはなぜか懐かしさを感じた。一度もケニアに来たこともなければ、ケニア側実行委員や土地の人々と直接会ったことはない。しかし自分がこの場所を気に入っていることが分かった。普段の生活では、JKSCの一員として私は何ができるのか、人生で初めて空気を読もうとした。舗装されていないがたがたの道路をものすごい速度で走る乗り合いバス、前日に決めた時間どおりに進まないのんびりとした日々、日本で生活していれば絶対に予想できないであろう問題など、実際に行かなければわからないことが多くあった。

今回このような貴重な機会をいただき、心から感謝しています。JKSCの実行委員、そして協力してくださった皆様、本当にありがとうございました。

企画局

東京大学2年 張文博

20日間の本会議を経て、日本では考えられない多くの貴重な経験をさせていただいた。この貴重な機会の実現に尽力してくれた日本側、そしてケニア側の委員長にまず感謝したい。この本会議を開催する過程の中で多くの障害や問題があり、行く前はどのような事かと思っただが、ケニア側実行委員の努力と折衝の結果、無事に乗り越えることができた。彼らの協力がなければ第15期

本会議の開催は不可能であったため彼らにもとても感謝している。

今回の本会議にはいくつかの新しい試みがあった。そのうちの1つが家具付きハウスとレンタカーを借りたことである。1つの家で共同生活をする事で両国の実行委員の連帯感が増したといえると思う。また1つの家で自炊や家事をする中で、相互の文化や習慣を上手く伝えあうことができるいい機会にもなったと思う。その他にも今回はムスリムのケニア人が参加し、彼らのおかげで日本ケニア間のみならずイスラム文化、伝統と交流することもできた。この一例として彼らの家へ訪問したことが挙げられると思う。彼らの家の礼拝室を訪問し、伝統的衣装を見せていただいたのは非常に興味深かった。

以上に述べたように15期には多くの新しい試みがあったが、一方で以前からの内容を踏襲した部分も多々ある。例年と同じく本会議の最後に在ケニア日本国大使館でシンポジウムを開くことができたし、JICA等の企業訪問も充実させることができた。分科会のテーマとして自分はアートを選んだが、ケニアの芸術が直面している問題、現状などを知り将来少しでも自分が貢献できればなと深く思った。他にもサファリなど日本側実行委員にとっては初めてのことで、日本にいた時には想像もできなかったような経験をすることができた。

このようにして、人から聞いたケニアで

はなく自分の目でしっかりと見たケニア像を持つことができたのは自分の財産だと感じている。そして自分が委員長として JKSC を引っ張っていく来期、日本を代表する気持ちで恥じない日本をケニア側実行委員に見せていきたいと強く願っている。15 期のみなさんに出会えたこと、支援してくださった企業の方、OBOG の方にはこれからも感謝の気持ちを持ちながら、活動を続けていきたい。

ケニア側実行委員長
USIU3 年 Rahab Kihuha

First and foremost I must begin with a note of thanks to all of the JKSC members who made this conference a success. Initially we were faced with many challenges with planning due to the issue of insecurity in Kenya. However due to teamwork and coordination we were able to do our best with the resources available to us. One thing I noticed with this conference was how different and unique the plans and activities were done. For the first time in the history of the conference we rented a house and lived together. This meant more interaction between the Japanese and Kenyan members. I think the Japanese members got a firsthand

experience of Kenyan culture raw and pure.

Secondly the topics and the places we visited really made me appreciate some things and places I had taken for granted. An example was Paa Ya Paa arts center and national archives. In the case of archives I pass it every day on my way to school but have never been inside. The experience is one I will not easily forget. I learnt so much about Kenyan history .The visit to one of the member's home though unexpected turned out to be wonderful. The three study topics apart from history also taught me to appreciate the various forms of art here in Kenya and relations that Japan and Kenya have especially through JICA.

Personally I enjoyed all the moments we shared with the other Kenyan and Japanese members, and all the activities we did except ice skating. The conference played a huge role in my life and really taught me a different perspective of looking at everything. I am glad I was a part of the 15th JKSC conference.

(日本語訳)

まず初めに、今回の JKSC 本会議を成功に導いた実行委員にこの場を借りてお礼を言いたい。当初は、本会議日程や治安面へ

の対策において多くの問題が発生した。しかし、実行委員が協力し、持ちうる限りの力を発揮したことで、最善の成果を上げることができた。今期の1つの特徴として私が強調したいことは、今までの本会議にはなかった活動の形を作り出したことである。JKSC 史上初めて、実行委員全員で1つの家を借り、そこで共同生活を送った。この試みにより、両国実行委員はより多くの交流ができたと思う。また、日本側実行委員は生のケニアを直に体験することができたと思う。

次に、訪問させて頂いたいくつかの場所で、普段当たり前だと思っていたことを再認識することができた。その一例が Pa Ya Paa アートセンターと国立記録館である。毎日学校へ行く途中に位置しているにも関わらず、これまで一度も訪れたことがなかった。これらの経験によって、ケニアの歴史について多くのことを学ぶことができたし、忘れられない経験となるだろう。さらに、ムスリムのケニア側実行委員宅への訪問も素晴らしいものであった。歴史以外にも3つのテーマを設けた分科会活動ではケニアの芸術について改めて考えることができ、JICAの活動による日本とケニアの両国の関係も学ぶことができた。

個人的な感想を述べると、日本側実行委員、ケニア側実行委員と過ごした時間は常に楽しく、怖い思いをしたアイススケート以外の活動には満足している。今回の本会

議は、私の人生のなかで大きな存在であり、あらゆるものに対する多角的な視点を身につけることができた。15期 JKSC の一員として活動できたことを本当に嬉しく思う。

副実行委員長

USIU2 年 Jalal-U-Din Ayub

I felt the urge to attend the 15th JKSC conference as I have always had the hope and belief of not only opening my mind to different views and opinions, but also meeting and learning how to work hand in hand with people from a different society and culture in order to achieve mutual goals i.e. “A better society.”

Japan and Kenya according to me are both great nations, but can be made better through interactions, conferences, discussions and symposia amongst the youth who actually, are the “Leaders of tomorrow.” Many people want a better society, perhaps improved relationships with ally countries, but very few take a stand and try to improve these relationships, I believe this was a golden opportunity, not only to understand each other’s societies but also to build a bond that will hopefully last for years to come. A bond created between strangers that will someday make the two nations

stronger allies as well as support the idea of empowering future generations with similar opportunities such as the JKSC in order to further strengthen and maintain this bond. My main reason to attend the JKSC was to be a part of the creation of this special bond between Japan and Kenya.

My aim for the main conference as a vice-chairperson, was to gain effective communication skills through exposure to different styles of presentation and to be able to use them in assisting all members in their various roles while at the same time sharing my views and ideas as I further built on my experience in working as a team to have a successful conference. I also hoped to gain as much exposure to the Japanese culture and way of doing business as possible so as to be a successful businessman in the future.

JKSC gave me a wonderful opportunity of working in a group with a Japanese member as well as a Kenyan member. The topic "Arts in Kenya" was of interest to all of us. The gaining of effective communication skills and understanding one another enabled the three of us to come up with a perfectly put together presentation in a very short

time with no arguments or misunderstandings which truly, is a step towards achieving that mutual goal of "A better society."

An experience such as the JKSC conference is not one that can be acquired anywhere else and is therefore very unique in its own special way. This experience I believe, helped model me into a better citizen since I visited and got to know about places that I had never been to but were also in my reach. It also brought with it lots of lessons worth a lot more than money can buy. My hope is to one day become an owner of a successful business, and I feel that the JKSC conference has helped me take positive steps towards my goal in life. Today, just as different people sponsor students to attend the conference, tomorrow I wish to be in a position to do the same so as to enable others gain a similar or even better experience than mine.

I would love to express my utmost gratitude to all the sponsors, alumni and current members who played very important roles in making the 15th JKSC conference a success.

(日本語訳)

私は、自分とは違う視点や意見を尊重する

こと、違う社会に属し、違う文化をもつ人々と双方の目指す「よりよい社会」を達成するためにどのように共存するかを学ぶことを、常日頃から心がけている。それが私の15期 JKSC への参加意欲を掻き立てた。

日本もケニアも素晴らしい国であると思うが、将来を担う若い世代による両国間の交流や会議、討論、談話などを通して、さらにより国を目指せるとも思う。多くの人がよりよい社会を求め、国家間のよりよい関係を求めているだろう。しかし、実際に関係強化のために立ち上がる人はほとんどいない。JKSC への参加は、お互いの社会を理解し、長く続く絆を築くことができる絶好のチャンスだった。初めはよく知り合っていない者同士で築き上げていく絆が、いつの日か両国間の関係をより強め、その関係をさらに強化するための JKSC のような機会をより多く次世代にもたらしようになるだろう。私が JKSC に参加した最大の理由は、日本とケニアにおけるこの特別な絆を築くことに携わりたいと思ったからである。

副委員長としての私の目標は、様々な伝え方を考えてコミュニケーション能力を高めること、それを活かしてそれぞれ違う役割をもつ実行委員をサポートすること、さらには、1つのチームとして本会議を成功させるために、自分の経験をもとに築いた考えや意見を他の実行委員に共有することであった。また、私自身が将来ビジネス

マンとして活躍するために、日本の文化や日本のビジネスの在り方にできる限り多く触れたいとも思った。

JKSC は日本側実行委員・ケニア側実行委員が1つのチームとして活動をする素晴らしい機会を私に与えてくれた。分科会の「ケニアの芸術」というテーマは非常に興味深かった。活発なコミュニケーションを図り、互いに理解し合うことによって、短い時間しかなかったにも関わらず、口論や誤解も生むことなく、この分科会に所属する3人で協力して満足できるプレゼンテーションを作ることができた。これは、「よりよい社会」という相互の目標に近づく一歩となったに違いない。

JKSC での経験は、他では得られない、唯一無二のものである。自分で行くことができる範囲内にあるにも関わらず、一度も訪れたことがなかった場所を訪問したことは、私の市民としての成長であると思う。お金では買うことができない価値をもつ教訓もたくさん得ることができた。私の夢は、経営者として成功することであるが、この経験によってその夢への有意義な一歩を踏めたと思う。現在、私たち学生がこのような活動をするために多くの方が支援して下さいるように、将来の学生が、私がしたような経験、さらにはよりよい経験をするために、いつか私も支援する立場になりたいと願う。

最後に、15期 JKSC 本会議を成功に導いて下さった、スポンサーの方、OBOGの方、そして15期の実行委員に感謝の意を表して終わりとしたい。

学術局

USIU4年 Don Handa

The idea behind the Japan-Kenya Student Conference is to foster a deeper understanding between students from the different countries. One would assume that the process of international exchange would involve gaining knowledge about a different country. While this part is true, what stood out the most for me during this experience is the extent of knowledge that I gained, not about Japan, but about my home country Kenya.

While doing research on the chosen topics for study for this year's conference, I did learn quite a bit about Japan. The topic I chose to work on, international co-operation, involved learning about Japan not as a country existing on its own, but as part of the international community; the relationship that Japan has with the rest of the world. In this sense, my study for the conference brought my attention to the extent to

which Japan cooperates with Kenya, and to the numerous projects for which the Japanese government provides support for in Kenya. Such information, being a student of International Relations, is vital for broadening my understanding of the world we live in.

However, the experience of moving across different areas of Nairobi during the conference proved to be the most interesting part of the main conference. On a personal level, in my interactions with the Japanese students, I managed to learn about aspects of Japanese life that were quite different from the life that I have gotten accustomed to in my home country. In the two and a half weeks during which we lived together, I must say, Japanese sensitivity to time emerged as the starkest difference between the two cultures. This is not to say that other differences between the two peoples (the Japanese and the Kenyans) are insignificant, but rather, that the time-consciousness, and punctuality of the Japanese exists in sharp contrast to what we here in Africa have come to refer to as "African timing"; a generally unhurried, nonchalant attitude towards time-keeping.

Beyond the individual, watching the Japanese reacting to the various aspects of Kenyan life to which they were exposed was quite interesting. This presented the various perceptions that people outside Kenya hold of my home country, and further, the perceptions that Kenyans hold of foreigners. One thing I noticed was the mistaken assumption among some Kenyans that we met, that the Japanese students were actually Chinese. This spoke only to the extent to which the Chinese community has become visible, along with the obviously limited knowledge among the Kenyan public, of the different foreign communities present in Kenya today.

Ultimately, I immensely enjoyed the Conference for the opportunity that I had, to experience Kenya in a way that I had not done so before. For this, the Conference will remain one of the more stimulating experiences of my life. I am grateful for having gone through this, and would wish that it continues long into the future, so that many more people can see and learn, as I got to see and learn during this period.

(日本語訳)

JKSCの目的は異なる国の学生同士の理

解を深めることである。国際交流とは外国の知識を得ることだと考える人がいるだろう。それも事実だが、この経験を通して特に印象に残ったのは、日本についてよりも私の母国、ケニアについての知識が深まったことである。

本会議に向けて、自分が選んだ分科会のトピックの勉強をしている間に、私は日本について非常に多くのことを学んだ。私が選んだ国際協力というトピックは、日本という国そのものよりも、国際社会の一部としての日本、つまり日本と他国との関係を学ぶことに役立った。その意味では、本会議に向けての勉強のおかげで、私の興味は幾分、日本とケニアの協力、そして日本政府がケニアで行っている援助のたくさんのプロジェクトへ向いた。そのような情報は、国際関係を学ぶ学生にとっては、私たちが住んでいる世界への理解を広げるためにも必要不可欠である。

しかしながら、本会議中に最も興味深かったのは、ナイロビの異なる地区を移動した体験だ。個人的なレベルでは、日本側実行委員との関わりの中で、私が自分の国で習慣としてきたものとは全く異なる日本の生活の側面を知ることになった。私たちが共に過ごした2週間半の間に両国の文化で最も違うと感じたことは、時間観念である。このことは日本人とケニア人の間の他の相違点を取るに足りないというのではなく、むしろ日本人の時間観念とその正確さは、

私たちがここアフリカにおいて時間管理に対して無頓着で、急がない、いわゆる「アフリカ時間」の態度とは非常に対照的であったということだ。

個人的なレベルを超えて述べれば、ケニアの生活の様々な側面に直面した日本側実行委員の反応を見るのは非常に面白かった。外国人が抱く私の母国に対する様々な認識を知ることができ、さらにはケニア人の外国人に対する認識も知ることになった。私たちが出会ったケニア人の中には、日本側実行委員を中国人と間違える人が多かった。中国のコミュニティは、ケニアの様々な外国コミュニティの中でも目立ってきているということなのだろう。

最後に、この本会議をこれまでにないケニアを体験するという意味で非常に楽しむことができた。私の最も刺激的な経験の1つとして残るだろう。このような経験ができたことに感謝し、そしてより多くの人が私のように経験し、学ぶことのできるよう、JKSCが続くことを望みたい。

会計局

USIU2年 Melanie Macoloo

I attended the 15th JKSC conference in hopes of leaning the Japanese culture but also learning to work with people from a different culture. I have really enjoyed the conference very much as it

has helped bring a better understanding and better relationship between Kenya and Japan.

This was a golden opportunity for me to be part and parcel of as it was very educational through the different discussions we had. We discussed and presented topics which affect the two countries (Kenya and Japan) and we also discussed ways in which Kenya can learn from Japan and vice versa. This conference brought together strangers from different parts of the world and taught them how to work together and learn from one another. It also gave me a clear understanding of the Japanese culture.

My post as the finance chair for the Kenyan side was to ensure that the resources were spent well and we did not run out of money which was a success. I was also part of a group which did their research on Art in Kenya today which enabled me to work in a group and it also taught me to consider and appreciate my group members' opinions and work together in harmony.

This experience was very unique and life changing and I am not the same person I was before this conference. I have become a better individual and now

I am able to say I can work well with Japanese people without any conflicts. JKSC has also helped to bring out the leader in me which I did not know existed. I cannot really put into words how appreciative I am to have such an experience.

I would like to thank everybody who made this conference a success starting from the sponsors who without their funding non of this would be possible, the JKSC alumni and the 15th JKSC conference Japanese members.

(日本語訳)

私は、日本の文化を知りたい、異なる文化の人々と共に活動したいという思いで、第15期本会議に参加した。私は本会議を非常に楽しんだし、両国実行委員の相互理解が深まり、よりよい関係を築くことができたと思う。

様々な議論を行うJKSCで実行委員として活動したことは、私にとってとても貴重な経験になった。私たちはケニア、日本の両国で生じている問題、互いの国から学ぶことができることについて議論を行い、発表した。この本会議によって、遠い国から来た、言語も文化も異なる者同士が共同生活をして、どのように協力して共に活動していくか考え、互いから学びあおうとする

機会を得た。また、本会議は日本文化について明快に理解する機会でもあった。

会計局という私の役割は、予算が適切に使われているか、使いすぎはないか管理することであったが、今回はしっかりとその役割を果たすことができた。分科会活動では、ケニアの現代芸術の分科会に所属したが、他の人の意見を尊重しながら調和を保って議論に取り組むことを学んだ。

JKSCでの経験は、他では経験したことがないようなもの、私の人生を変えるものであり、本会議に参加する前の私と今の私はまるで別人である。以前よりも私自身が成長し、今なら日本人と仲違いすることなく物事に取り組めるだろう。今までは認識していなかった私の中のリーダーシップに気付くこともできた。このような経験ができた嬉しさは、言葉では表現しきれない。活動のために不可欠であった資金を下さったスポンサーの方々をはじめ、JKSCのOBOG、15期日本側実行委員、この本会議の成功を支えて下さった全ての方に多大な感謝の意を表したい。